

「わざと」の意味・用法について

佐々木 文彦

キーワード：わざと，副詞，意味分析，語義の変遷

はじめに

「わざと」という副詞がいわゆる古今異義語のひとつであることはよく知られている。

「人のもとにわざときよげに書いてやりつるふみの返りごと、いまはもてきぬらんかし、あやしうおそき、とまつほどに」（『枕草子』）

の「わざと」は現代語では「とりわけ・格別に」などと言うところであるし、

「しろき單のいたうしぼみたるを、うちまもりつつ書きはてて、前なる人にもとらせず、わざと立ちて、小舎人童、つきづきしき隨身など近う呼びよせて、ささめきとらせて」（『枕草子』）

の「わざと」は今なら「わざわざ」と言うところである。

これに対して現代語の「わざと」は

「そこで横井六段も近頃は心得て、わざと落手を指して一度は相手につけこませることにしていた」（北杜夫『楡家の人びと』）

のように、好き好んですることではないこと、普通ならうっかりやってしまうことを意図的に行うような場合に用いられる。

『日本国語大辞典（第二版）』では「わざと」を

- ① こうしようという、ある意図や意識をもって事を行なうさまを表わす語。現在では、そうしなくてもいいのにしいてするさまにいう場合が多い。わざわざ。意識的に。わざと。

と説明している（下線部佐々木。用例および②以下は省略）。

本稿では、この語が現代においてもっぱら「そうしなくてもいいのにしいてするさま」に用いられるようになったのはなぜか、古典語の「わざと」と比べた時にどのような点で異なるのか、その変化はいつ頃どのようにして生じたのか、などについて考察してみることにする。

国語辞典に見る「わざと」の意味と用法

まず、「そうしなくてもいいのにしている」とはどういうことだろう。「そうしなくてもいい」といっても、やはり本人にしてみれば必要があるからそうするのである。例えば上に掲げた『榎家の人びと』で横井六段が「わざと落手を指して一度は相手につけこませることにしていた」のは将棋の相手が負けず嫌いの病院長であり、その機嫌を損ねないためであることがこの部分の前を読むとわかる。「わざと」が用いられる際の文脈上の条件について、くわしく見てみることにする。

手元の国語辞典の「わざと」の意味記述を比べると次の通りである（略称については末尾の注を参照）。

辞書略称	意味記述	「参考」など
日国大	①こうしようという、ある意図や意識をもって事を行なうさまを表わす語。現在では、そうしなくてもいいのにしているさまにいう場合が多い。わざわざ。意識的に。わざと。 ②状態がきわだつさま、格別に目立つさまを表わす語。とりわけ。特に。 ③正式であるさまを表わす語。本格的に。 ④事新しく行なうさまを表わす語。あらためて。 ⑤ほんの形ばかりであるさまを表わす語。ほんのちょっと。少しばかり。わざと。	
岩波	故意に	名詞「わざ」＋助詞「と」。「わざわざ」に比べ、悪意だったり自分の利益を図ったりの場合が多い。
新選	①故意に。わざわざ。 ②(古語)とりたてて。特別に。 ③(古語)[助詞の「の」を伴って]正式・本式であるようす。 ④(古語)ほんのちょっと。形ばかり。	「わざわざ」に比べて、「わざと」は意図的な行為を示す場合が多い。
新明解	①含む所が有ってそうすることを表わす。〔多く消極的な行為を主体的に選択する状況について言う〕 ②〔雅〕△自然(偶然)にではなく、有意的にそうすることを表わす	
新解	ことさらに。故意に。	
現代新	自然の成り行きに対して意識的に何らかの行為をしかける様子。故意に。わざわざ。	
最新	①わざわざ。特別に。 ②故意に。意識的に。	
詳解	なりゆきではなく、意識してするさま。故意に。	
現代標準	意識的に。	(類)ことさら・故意に・わざわざ

『日本国語大辞典』や『新選国語辞典』は古語も含めた記述となっているが、現代語の意味・用法を特徴付ける記述としては、

「現在では、そうしなくてもいいのにしいてするさまにいう場合が多い」（日国大）

「含む所が有ってそうすることを表わす。〔多く消極的な行為を主体的に選択する状況について言う〕」（新明解）

「悪意だったり自分の利益を図ったりの場合が多い」（岩波）

「自然の成り行きに対して意識的に何らかの行為をしかける様子」（現代新）

「なりゆきではなく、意識してするさま」（詳解）

などが見られる。表現はさまざまであるが、いずれも「わざと」が「わざわざ」などとどう違うかを限られたスペースの中で記述しようとしたものである。これを見ていて気づくこと、疑問に思うことは次のようなことである。

○「そうしなくてもいいのにしいてする」「自然のなり行きに対して～しかける」は「わざと」が文脈の流れから見て不自然な行為と結びつくものであることを示すと思われるが、それは「わざと」の意味のどういう面を表しているのか。

○「消極的な行為」「悪意」とはどのようなものか。

実際に用例を見ながら検討しようと思うが、その前にこの語の意味を詳細に分析している次の二著を参照しておきたい。

『基礎日本語1』（森田良行 角川書店 1977）

「わざと」は、その行為自体が究極の目的ではない。裏に真の目的があり、その目的を達成するために、□ 故意にその行動をなす場合。その行動をなすことによって自動的に期待する結果が転がり込む（対自己）のである。あるいは□ いったん別の行動をなして、相手もしくは他者にある反応を起こさせ、結果的に所期の目的を達成する意図的な行動。ねらいはもう一つ先にあり、その究極目的（一種の下心）のために行なう演戯（対他者）である。そこから「わざと」には“故意に”“他意があつて”“心にもない嘘の行為”という意味が生まれてくる。（中略）

「わざと」は、奥の目的を達するための手段として仮の目的を設定し、それによって目指す結果を手に入れようというずるい、悪辣な、いたずらのないしは芝居がかった行為（マイナス評価）。相手のためを思ってすれば、作為的思いやりの行為（プラス評価）。（以下略）（p484・5）

『現代副詞用法辞典』（飛田良文・浅田秀子 東京堂出版 1994・9）

意図的に行動する様子を表す。ややマイナスイメージの語。述語にかかる修飾語として用いられる。主体がある隠された目的のために通常とは異なった行動を意図的に起こす様子を表し、しばしば悪意の暗示がある。目的がはっきりしない場合や、通常の行動を起こす場合、無意識に行動する場合には用いない。（以下略）（p593）

森田氏の分析によると、「わざと」は裏に隠された真の目的を達成するために他の何かを行なうことであり、ずるい行為である場合もあれば、思いやりの行為になる場合もあるということである。

飛田・浅田氏の分析ではこの語はややマイナスイメージの語であり、ある隠された目的のために通常とは異なった行動を意図的に起こすというものである。ここでいう「通常とは異なった行動」とは森田氏の分析でいう「故意」の行動、「演戯」に当たるものであり、『日本国語大辞典』でいう「そうしなくてもいいのにしてするさま」である。

それでは実際の用例ではどのような「通常とは異なった行動」をどのような「真の目的」を達成するために行なっているのか、用法を細かく見てみることにする。

現代語の用例とその分析

調査の対象は『新潮文庫の100冊』のうち、現代語訳である『新源氏物語』と翻訳作品とを除いた66冊、光文社「カッパノベルス」の138冊、計204冊である。

全体を通じて「わざと」の用例数は725例。結論から言うと「わざと」の結びつく行為はいずれもある意味で「通常とは異なった行動」「不自然な行動」「成り行きに反する行動」と言えるものである。以下、目立った例をいくつか見ながら分類して見ることにする。

A 語彙や表現形式から不自然さが見て取れるもの

1) 意図にそぐわない行為、うっかりしてしまうこと

「小さいときからよく相撲や柔道をしましたが、相手はほとんど父の部下の子供でわざと負けてくれました」（森村誠一『超高層ホテル殺人事件』）

「あの人は、そうした傾向にみずからの体を賭けて、わざと捕まったのではあるまいか。おのれの犠牲によって、切支丹の結束を強めようと思うようになったのではないか」（赤木駿介『南蛮馬春砂』）

「お伽話の主人公をわざと間違えて、リリーさんは、女たちのとめどない井戸端会議に終止符を打ってくれたのかもしれない」（落合恵子『炎の花』）

「負ける」「捕まる」「間違える」という行為は、通常ならば本人の望まない結果（負ける・捕まる）であったり、不注意でしてしまうこと（間違える）であったりする。「わざと」には何かを積極的に行なうという意味があるので、これらの行為と結びつくと不自然な行為と受け取られることになる。そしてその不自然な行為はその裏にある真の目的を達成するための行為であり、上記の例ではすべてその裏の目的が読み取れる。

通常ならば勝とうと努力するのに、成り行きに反して意図的に負けるわけで、逆に

×わざと勝つ

とは言うことが出来ない。もし「わざと勝つ」という表現が成り立つとすれば、何らかの理由で負ける約束になっていたとか、演技などで負けるはずのシナリオだったのにそれに反して勝ちに行ったというような、たいそう複雑な文脈がなくてはならない。同様に次のような表現も普通は成り立たない。

×わざと努力する

×わざと合格する

×わざと成功する

用例を調べた範囲では、このグループに属する語は

騙される・失敗する・よろける・よろめく・皿を割る・遅刻する・書き落とす
などであった。そして「わざと勝つ」に類する複雑な文脈を持った例は見当たらなかった。

2) 何かのふりをする・何かをしてみせる・～そうにする

「自分は、わざとしおしおと宿直室にはいって行き、椅子に腰かけて火鉢にあたりました」
(太宰治『人間失格』)

「私はわざとうめき声をたて、身動きをした」(生島治郎『追いつめる』)

「しおしお」とした態度になったり「うめき声」を立てたりすることは、本来自らの意志で行なうことではなく自然とそうになってしまうものである。それを意識的に「わざと」するところから、不自然さが生まれる。

何かの刺激に対する反応や感情を意識的に起こすわけであるから、いわゆる「演技」をしているというべきものであり、次の諸例に見るように「～して見せる」「～のふりをする」「～そうにする」という表現と結びつくものが多い。

「円城寺は、わざと驚いてみせた」(島田一男『科学捜査官』)

「三冬のは本物の汗だが、小兵衛のは、わざとかいて見せた汗であった」(池波正太郎『剣客商売』)

「といいながらも、吐息を一つついた。わざと酔ったふりをしているのである」(司馬遼太郎『国盗り物語』)

「一蔵は、そんな父子のようすを、尻目に見て、わざと気のつかぬふうを装い、しゃべりたいだけのことをしゃべってしまうと」(徳永真一郎『大久保利通』)

「こんなとき、久しぶりの再会を懐かしがってみせたりしないで、わざとつまらなそうな顔をする竜泉寺である。恥ずかしいのだ」(長井彬『北アルプス殺人組曲』)

このような演技をすることを通じて、隠された真の目的を達成しようとしているのである。

B 語彙や表現形式からは不自然さが見て取れないもの

「パパはあたしをおぼえていました。そしてわざとあたしの年をききました。あたしが十七歳にもなっていないことをあたしにおもいださせるために」(倉橋由美子『聖少女』)

「実は印刷所の方に行こうかと思ったが、こんな姿をして訪ねて行っは、おまえの肩身が狭かろうと思って、わざとこっちへやって来たのだよ」(山本有三『路傍の石』)

「年をきく」ことも「こっちへやって来る」ことも、それ自体は意識的にする行為として何ら不自然なことではないが、前者では「あたしをおぼえてい」るにもかかわらず年をきいており、後者では普通なら印刷所へ行くのにここに来ている、という不自然さがそれぞれの文脈から読み取れる。そう

することによってそれぞれ「あたし」の誘惑をかわすこと、「おまえ」に肩身の狭い思いをさせないことという行為者の隠れた目的が達成されているのである。このように、Bのグループに属するものは他の例もみな、一見したところ是不自然さを感じさせない行為でもその文脈からは「成り行きに反して」と理解される行為と「わざと」が結びついており、それは行為者なりの真の目的のためになされるということが読み取れる。

現代語の意味・用法のまとめ

以下、用例を観察した結果をまとめることとする。

① 「わざと」は「自然の成り行き」に対して何らかの意味で反することを意図的に行なう場合に用いられ、それは次のように分類される。

- A 1) 意図にそぐわない行為、通常はうっかりしてしまうはずの行為を意図的に行なう（わざと負ける・わざとよろける）
- 2) 何かのふりをする・何かをしてみせる・～そうにする（わざと眠たいふりをする）
- B 語彙や表現形式からは不自然さが見て取れないが、文脈から成り行きに反することが読み取れる

用例数の比率で見ると

- A 1) 6%
- 2) 9%
- B 85%

となり、Bの例が大半を占める。

② 辞書の記述等に見る「消極的な行為」という点については上の分類のAの1)の場合に顕著であるが、Aの2)とBの場合においては必ずしも「消極的」とは言えない。また、全体に「悪意」のある行為かどうかという点についてもさほど例が多いとは言えない。「自然の成り行きに反して隠された真の目的を達成する」ということから「表面の行動の陰に隠された悪意」ということが連想されるが、実際の用例を見ると遠慮や気後れを隠す心理から出る行為であったり、冷淡に振舞うことが結果的には相手に対する思いやりと結びつくという例なども少なくない。

さて、それでは現代語の用例について見た上記の観察結果を元に、時代を遡りながら順に古い時代の用例を観察して比較検討してみることにする。

明治時代の用例とその分析

明治時代の用例について、「CD-ROM版新潮文庫明治の文豪」を資料として調査してみた。用例数は全部で387例。

まず、Aの1)に当たる例は

「次第に人通が薄らぐので、九郎右衛門は手拭を出して頬被をして、わざとよろめきながら歩

く」（森鷗外『護持院原の敵討』）

「知っていながらわざと間違た振をして見せたのか、或は最初から事実を知らなかったのか、とにかく吉川はやつと腑に落ちたらしい言葉遣いをして」（夏目漱石『明暗』）

「知ったことをわざと知らない振をして、間違った事を言ったり何かして、お嬢さんに打って貰った」（森鷗外『キタ・セクスアリス』）

の3例のみであった。漱石の例と『キタ・セクスアリス』の例はともに「振りをする」の例ではなく「間違える」の例として挙げておく。

次にA の2)に当たる例は、

「いよいよ世の中は面白くないの頂上、勝手にやつて見ませうと態とすねて、むつと顔をして見せるに」（樋口一葉『ゆく雲』）

「お延はわざと叔父を相手にしない振をした」（夏目漱石『明暗』）

などである。

Bに当たる用例は、

「彼はわざとそれに切手を貼らないのである。その代り裏に自分の姓名も書かずに投函していた。私はそれが為に、倍の郵税を二度程払わせられた」（夏目漱石『硝子戸の中』）

「叔父さんはあれが道楽なのよ。だから何かさせようと思ったら、うらを云うと、此方の思い通りになるのよ。此間蝙蝠傘を買ってもらう時にも、いらない、いらないって、態と云ったら、いらない事があるものかって、すぐ買って下すったの」（夏目漱石『吾輩は猫である』）

など、ほぼ現代の用例と同様であり、自然の成り行きに反する行為をすることによって隠された真の目的を達成するという状況で使われている。

用例数の割合は

A 1) 0.01%

2) 0.06%

B 99.3%

となる。現代の用例ではAが15%あったのに対し、明治時代の用例ではAがわずか0.07%であり、明治期に比べて現代の用例におけるAの部分の比率が極めて高いことが分かる。

まとめると、「わざと」の用法全体は現代とほぼ同じであるが、AとBの比率が大きく異なると言える。明治期における「わざと」の用法を探るのに「明治の文豪」のみの調査では不十分であろうし、他の作品群の調査によって傾向が異なる可能性もあるが、一つの調査結果としておさえておきたい。

古典語の用例とその分析

それでは古典語の用例における「わざと」の使用状況はどうであろうか。岩波の古典大系（電子テキスト）を用いて用例調査をしてみることにする。この調査には国文学研究資料館のホームページで公開されている日本古典文学本文データベースの岩波書店旧版『日本古典文学大系』全作品（100巻560作品）を用いた。以下の時代区分はこのデータベースの作品区分による。

近世の用法

近世の用例は全部で103例である。

現代語と同様と見られる例は

「トいゝつゝよぎを引かぶり、心のうちには、おのれ今にはひかけてやろうと、わざとねるふりにて、よこになるとじきにそらいびきをかく」（『東海道中膝栗毛』）

「何しに馴染もなき私に、何がお心の残りて、續いて逢ふて下さるべきや。此心故此間はわざとつれなふいたしました」（『傾城禁摺本』）

のようなものがあり、何らかの意図が働いて成り行きに反する行為を行なう例である。

これに対して、現代・明治期には見られない次のような例が少なからず見られる。

「狐、急ぎ走り歸つて、粥のやうなる食物を浅き金鉢に入て、鶴にむかつていふやう、『御邊は固き物をきらひ給ふなれば、わざと粥をこそ』とてさゝげければ」（伊曾保物語）

この例において「鶴は固い物が嫌いなので粥を用意した」というのは自然の成り行きどおりの行為である。実は「浅き金鉢」に入れたということが狐の深謀遠慮なのであるが、この文において「わざと」が意味するのは無論のことではなく、鶴のために「わざわざ」粥を用意したということである。このような例において、「わざと」は自然の成り行きに反するものではなく、隠された真の目的を持つわけでもない。このような例は「明治の文豪」の例などには見出されなかったものである。逆にみると、このような例がなくなったという点が近世と明治期の「わざと」の用法の違いの最も大きな点である。

ちなみに現代と同様の例が全体の用例数に占める割合は70%であった。またAの1) に当たる例は「わざと負る」「わざとまるぶ」で計4例。Aの2) に当たる例は「知らぬふり」「ねたふり」でこれも計4例であった。

中世の用法

この時期の用例は81例で、近世と同様に

「この唐人は、しばしは待ちけるに、音もせざりければ、わざと使おこせて、文を書いて、恨おこせけれども」（『宇治拾遺物語』序）

のような、現代語ならば「わざわざ」とでも言うべき例が多数見出される。

現代と同様の例と言えるものは、

「源三位入道は、長絹のよろひ直垂にしながらはおどしの鎧也。其日を最後とやおもはれけん、わざと甲はき給はず」（『平家物語』）

のようなものである。最期を覚悟してわざと兜を着けなかったというのである。

現代と同様の例は45例で、全体の56%であった。その中でAの1) に当たる例は「わざとけつまづきて轉び」という例が1例。Aの2) に当たる例は「物狂ひにわざと振舞ひ」という例が1例あった。

中古の用法

この時期の用例は265例であるが、本論冒頭に掲げた『枕草子』のような例が大半で、現代と同様

と思われる例はほとんど見当たらない。わずかに次のような例がそれに当たるとされる。

「然レバ兼時、負馬乗タル作法万ノ人ニ令見知ムト思テ、態ト此ク宮城ニハ乗テ、故ニ負クル事ニヤ有ラムト人疑ヒケル（中略）然レバ、其ノ日兼時態ト好テ負タルトゾ世ノ人皆讃メ■ケルトナム語り傳ヘタルトヤ」（『今昔物語集』）

「官使、優婆塞ノ母ヲ捕ツ。優婆塞、母ノ被捕ヌルヲ見テ、母ニ替ラムガ為ニ、心ニ、態ト出来テ被捕ヌ」（『今昔物語集』）

それぞれ、負け馬に乗る作法を万人に知らしめるために「負け」、捕らえられた母の身代わりになるために「捕らえられ」という、いずれもAの1) に当たる例である。

「わざと」の例が「成り行きに反した、隠された目的」のための行為かどうかを文脈の中で判断するのが微妙な場合もあり、あるいは下のような例は現代の例に近いものと見るべきかも知れない。

「いと、あはれなる事にこそ。昨日、ほのかに、聞き侍りき。『いかに』とも、きこゆべく、思ひ侍りながら、『わざと、人に聞かせ給はぬ事』と、聞き侍りしかばなん」と、つれなくの給へど、いと、堪へ難ければ、言少なにておはします」（『源氏物語』）

「取り立てて人に聞かせたりしない」ということが他者への配慮として働くと「隠れた目的」のための行為ということになる。このような言い方が前提となって現代の用法に通じる言い方が生じたものであろう。けれども、中古において、少なくとも中世以降の例と同様に「現代の例と同じ」と明白に判断できるものは『今昔物語集』の3例のみであった。

おわりに

以上、現代から中古まで時代を遡って「わざと」の用例を観察してみた。中古の末期に見え始めた「成り行きに反する、隠れた目的のための」行為としての「わざと」が中世・近世と次第に用法を広げ、明治期になるとほぼ現代と同様の用法を持つようになったこと。さらに明治期から現代に移るにつれて、「わざと負ける」「わざと～のふりをする」などのA類に属する用例が増えたことなどがわかった。今後の課題として、古語「わざと」の現代語訳にあたる「ことさら」「わざわざ」などとの用法を比較することや、現代語の「わざと」のように「隠れた目的のための」行為という主体の心理に関わる副詞の用法について全般的に考察を進めたいと考えている。

注【辞書名略号】「日国大」（小学館『日本国語大辞典 第二版』2002年1月）・「岩波」（岩波書店『岩波国語辞典』）・「新選」（小学館『新選国語辞典』第八版2002年1月）・「新明解」（三省堂『新明解国語辞典』第五版1997年5月）・「新解」（小学館『新解国語辞典』第二版2001年2月）・「現代新」（学習研究社『学研現代新国語辞典』改訂第三版2002年4月）・「最新」（角川書店『角川最新国語辞典』1998年1月）・「詳解」（旺文社『詳解国語辞典』重版1998年5月）・「現代標準」（学習研究社『学研現代標準国語辞典』2001年4月）

『日本古典文学大系』の本文は国文学研究資料館のホームページ（<http://www.nijl.ac.jp/>）からダウンロードして使用した。

